

『葉隠』における「曲者」について

岡田 大助*

要旨

本稿は、近世を代表する武士道書『葉隠』における「曲者」の全用例を踏まえた上で、その内実を総合的、多面的に明らかにしようとするものである。

キーワード：葉隠、武士道、曲者、武勇、忠義、死の覚悟、頼もしさ、武士の一分

序

(1) 背景と問題関心

従来の『葉隠』研究において、「曲者」は武士の理想を言い現すものとして、既に多く言及されている。しかしながら、「曲者」自体に焦点を当て、「葉隠」における「曲者」の全用例を踏まえての詳細な解釈は、管見の限りなされていない。本稿では、『葉隠』で使用されているすべての「曲者」の用例を踏まえ、従来指摘されていなかった点も含め、「曲者」の内実を総合的、多面的に明らかにすることを目的とする。

(2) 曲者の概念の概要

まずは、「曲者」の概念について、本稿の見通しを示すことを兼ねて、あらかじめ確認しておこう。

「曲者」とは「クセモノ」と読む。「クセ」とは、曲がっている、外れている、という意味であり、何らかの標準的な基準から外れていることを意味する。そして、『葉隠』において曲者は、武士のありようを指し示しているので、武士の標準的な基準に照らして、そこから外れていることを意味する。ところで、標準的な基準を外れているといっても、それは可能性としては、良い意味でも悪い意味でもありえる。むしろ、標準的な基準を外れているのだから、どちらかといえば悪い意味として使われるのが一般的であろう。しかしながら、『葉隠』において曲者は、ほぼすべて良い意味で使われている。つまり、標準的な基準と比べ、並外れて優れた武士のことを指し示しているのである⁽²⁾。さらに、武士は戦闘を生業としているので、戦闘に並外れて優れる、というのが、さしあたりの意味となる。

従来の解釈の代表的なものとして、『校註葉隠』⁽³⁾では、「クセモノ。

二〇二三年一月三〇日受付

*江戸川大学 基礎・教養教育センター教授

勇者、しつかり者など、良い意味にいふ。葉隠に用いられた「曲者」はほとんどすべて「剛の者」の意」とされる。あるいは、最近の代表的な訳注の一つ『定本 葉隠 全訳注』(以下『定本』と略記)でも、「通常の基準では測れない剛の者、別格、破格の存在として語り伝えられた。葉隠のキーワードの一つ」とされる。さらに、近年のもう一つの代表的な訳注『新校訂 全訳注 葉隠』(以下『新校訂』と略記)では、「普通の人とは違った、剛勇の者のこと。理想的な武士の姿の一つ。」と規定している。これらは、通常の基準を超えた剛勇の者、という理解ではば一致している。

ところで、『新校訂』では、本稿でも後述するいくつかの重要な規定について、さらに補足して説明している。すなわち、曲者の頼もしさ・「落ち目のときに頼みとなる」点、あるいは、「無二無三に死に狂いする」のが曲者であるとする。また、志田吉之助が、その剛勇を隠している点についても言及している。

先行する三つの注釈の解釈は、いずれも間違いではなく、むしろ限られた紙幅の中で本質を抉り出した優れた注釈である。しかし、それらはそもそも本文の語注の一つという限られた紙幅の制約があるため、本稿で後に詳述するような、『葉隠』の全用例から解釈できる「曲者」の多種多様な意味からは、もっとも詳しい『新校訂』ですら、そのいくつかが漏れ落ちてしまっている。

本稿全体の解釈を先取りすれば、「曲者」の概念は、おおよそ以下の通りとなる。すなわち、曲者とは、『葉隠』で理想とされる並外れて優れた武士のことである。曲者は、武勇のみならず忠義においても並外れて優れている。また、曲者は、心が強く、いざという時には、即座の決断と実行ができる存在であり、死を覚悟し、夢のような嘘偽りの世から覚めた存在でもある。そして、優れた武士としての強い矜持を持ち、己の守ると決めた領域、いわゆる武士の一分を、命懸けで平然と守れる存在である。よって、曲者は契りを交わした主君や仲

間、妻や兄弟などに対しては、たとえ相手が落ち目になっても決して見捨てることのない頼もしい存在である。

さらに、外れていることをその本質とする曲者は、武士道に並外れて優れているのみならず、ときに武士の常識的な道義から外れることがあった。曲者は、ときに臆病で強欲なふりをしたり、平然と主君の命に背いたり、ときに武勇と忠義に優れるという武士道の常識的な道義を、より徹底した武勇と忠義の立場から、平然と外れてみせる。

このように、『葉隠』の全用例から読み取ることのできる曲者の内容は、従来押さえられてきた以上の豊かな内容を持つている。以下、本稿ではこれらの内実についてそれぞれの用例に即して詳しく見てゆくことにしよう。

一 武勇に並外れて優れる

はじめに、『葉隠』における「曲者」の最も基本的な規定として、「武勇に並外れて優れる」点を、『葉隠』における「曲者」用例に即して明らかにする。第一に、武芸に並外れて優れる点、第二に、勇氣に並外れて優れる点について見てゆく。

(1) 武芸に並外れて優れる

まず、聞書一の四八で曲者と規定されている志田吉之助は、八の六九においても、多数の山賊に出くわした際、三人を切り倒し、二人に怪我を負わせたとき、あっぱれ曲者であると評されている。暴力で人を襲い金品を奪うことを生業とする山賊の少なくとも五人を相手に一方的に圧倒したその武芸は、並外れて優れていたといえよう。

あるいは、六の五で、無双の勇士、刀剣の早業の達人として取り上げられる高木鑑房あきみさは、寄宿先の縁側で家臣の因果右衛門に足を洗わせている際、宿主の前田伊代守に裏切られて後ろから首を討たれたとこ

ろ、かねてよりおそらくは一所に死のうと誓い合っていた家臣因果右衛門の首を、自分の首が斬られてから落ちるまでに切り落としていく。まさに死ぬ間際の一瞬に、家臣を一緒に連れて行くほどの、優れた武芸、刀剣の早業を見せている。もちろん、この聞書では、鑑房の刀剣の早業を褒め称えた後、足を洗っていた家臣因果右衛門のことを評して「これも劣らぬ曲者」としているのだ。鑑房が直接曲者と規定されているわけではない。しかし、「これ」が誰に劣らないのかといえば鑑房である。鑑房もまた曲者と理解してよいだろう。ここでも、並外れて武芸に優れた鑑房が、曲者とされているのである。

また、八の二三では、大島外記が、狩のお供で大猪を一刀で仕留め、時の佐賀藩主鍋島勝茂より「さてさて曲者かな」と賞賛され、銀を拝領している。大きな猪は、人間をはるかに超えた力を持っているため、それを一刀で切り伏せるには、よほど突出した武芸を必要とする。それ故、慶長の役や関ヶ原の戦いでの戦闘経験もあり、武士を見る目に長けた勝茂より曲者と賞賛され、褒美を得ているのである。

以上三つの用例から、並外れて武芸に優れている点を『葉隠』における曲者の規定とすることができ。

(2) 勇気に並外れて優れる

ところで、武勇に優れるとは、武芸に優れていることのみを意味するのではない。武芸を武勇の技術面とするならば、武勇の精神面に当たる勇気に優れている点も、同様に武勇が優れていることを意味する。もちろん、武芸と勇気の両方に優れていれば、それに越したことはない。しかしながら、『葉隠』では、かつて持っていた武芸を失ってしまったも、並外れた勇気があれば、やはり曲者とされている。このように見ると、『葉隠』の重視する曲者の武勇においては、武芸以上に、勇気が重要であるといえよう。

勇気とは、文字通りは、勇ましい意気の意味であり、辞書的な意味

は、物事を恐れない強い気力のことである。ところで、人間には生存欲があるため、死を強く恐れる傾向がある。これは、武士も人間である以上変わらないはずである。よって、戦や喧嘩といった戦闘の際、刀を抜くべきときに抜いて死の危険のある状況に自らを追い込むことは、戦闘を生業とする武士にとって、死の恐れを克服する強い気力・勇気が必要で、あるべき振る舞いとして重視されてきた。以下、この点について触れられている『葉隠』の曲者の用例を見てみよう。

まず、曲者について論究されるときには必ずといっていいほど触れられる一五五では、曲者は勝負を考えず無二無三に死に狂いするに極まる、という。これは、曲者とは、戦や喧嘩といった武事るとき、勝ち負けを考えず、ひたすら死を覚悟して狂ったように戦うことに尽きる、という意味であり、戦時に死を恐れぬ勇気がある者である、と理解できる。

次に、このような勇気を具体的に実践した例として、六の七〇で曲者として取り上げられる鍋島大膳のはたらきを挙げることができる。このはたらきについては、この聞書に直接描かれていることだけではなく、少し背景を補いながら解釈する。さて、鍋島大膳は、主君勝茂が島原の陣に参戦するにあたり、江戸で留守居をするようにとの命を聞かずに、島原の陣に従軍していた。さらに島原の陣の当日は、幕府の責任者が、攻撃を延期する命を出していたにもかかわらず、抜け駆けして一番乗りを果たし、命令違反の罪を背負って自害している。これは、戦で一番乗りという最も死ぬ可能性が高い危険を冒して手柄を立てたのに加えて、命令違反の責任を取って死ななければならないという二重の死の危険を冒して手柄を立て、佐賀鍋島藩の名を天下に轟かせたという意味で、徹底して死を恐れぬ強い気力を示していると理解することができる。

また、八の六六では、かつてはおそらく武芸に優れていたが、戦で負傷して片手となり、それ以降は実際には優れた武芸を発揮すること

ができなくなっていた石井権之助が、にもかかわらず、主君を貶めた相手に命懸けで抗議し、そのことが、曲者として賞賛されている。すなわち、権之助は島原の陣で戦い片手を失っていたが、その後、ある会合の席で他の武士に主君神代常親つねちかの島原の陣での働きが貶められたことがあった。すると権之助は、「主君の悪名をかぶせられておぬしを生かしておいては俺の一分が立たぬ。しかし、片手が無くては、おぬしと喧嘩もできぬ。だから、お前は俺の腹を切ってお前も腹を切れ」と抗議した。そうして、相手は詫言を入れさせ、訂正させている。これは、片手がなくて勝ち目がない相手に命懸けで抗議している点、死を恐れぬ勇気を持つている点が、曲者として賞賛されていると理解することができよう。

このように、『葉隠』の曲者の用例では、武芸に優れていることは必ずしも必要とされてはいない。それよりは、死を恐れず戦う勇気を持つことが、曲者として賞賛されているのである。

二 忠義に並外れて優れる

次に、『葉隠』の曲者が、忠義に並外れて優れている、とされている点について見ておこう。既に触れたように、従来の研究では、曲者は、剛勇の者、あるいは剛の者と理解されている。剛とは強く勇ましい、の意であり、武士道の書である『葉隠』においては、さしあたり、武勇に優れた者、の意味と連続する。しかしながら、強くて勇ましい性質が発動するのは、何も戦や喧嘩といった武事における場面ばかりではない。周知のように『葉隠』の思想では、武辺（武事）と並んで主君への奉公・忠義が、極めて重視されている。曲者の用例を調べていても、やはり武辺のみならず、忠義において突出した働きをする者が、曲者とされているものがいくつかある。曲者には、忠義に並外れて優れる、という意味もあるのである。本節では、これら忠義の

場面で並外れて優れたはたらきをした用例から読み取ることのできる、曲者の忠義に優れた側面を詳しく見てゆく。

まず、聞書四の七九では、鍋島勝茂の御葉役・采女と御印役・志波喜左衛門が、主君勝茂の臨終の直後、生前使っていた道具を破き、勝茂の行水と入棺を済ませた後、皆に今生の別れの挨拶をして追腹する場面で、その挨拶を受けた家老・美作守が、「曲者かな。曲者かな」と賞賛している。追腹は、戦時において「一所に死ぬ」ときは同じ時後まで裏切らず主君と同じ所で戦い、いざ死ぬというときには同じ時同じ場所死ぬという武士の理想を平時に応用したもので、江戸時代の初期までは一般的に行われていた。主君に最も大切な命を捧げるという意味で、主君のために尽くす忠義を極限まで行動で示したものである。これは、平時においてもとても困難な死に自ら向かう、という点で、強い心が必要とするものであり、平時における忠義の究極の表現であるといえる。そして、それを実行した采女と喜左衛門が、曲者として賞賛されているのである。^⑦

また、既に触れた六の五で、高木鑑房の家臣因果右衛門は、主君の死に際に主君に斬り殺されていた。これは、おそらくかねてよりの約束があつて、死の際に主君がお供に連れて行ったと見ることができるともできる。これも、一所に死ぬ武士の理想を実現した例とみることができる。そしてそのような因果右衛門が、やはり「曲者」と称されている。

曲者と評されるものの中には、このような追腹する、あるいは主君と一所に死ぬ、という究極の忠義とされるものを実現した武士が挙げられているのである。

また、既に触れた八の六六の手切れの権之助の曲者の用例では、主君を貶めた相手に対し、片手で喧嘩にならないため俺を殺してお前も切腹しろと、命懸けで抗議して撤回させ詫言を入れさせていたが、これも、命懸けで主君への忠義を尽くしたという意味で、忠義の事例と

みることもできる。

次に、六の七〇の鍋島大膳の用例を見てみよう。そこで大膳は「無双の曲者」と賞賛されているが、そこには、彼が小姓を三年間していた時に、主君の手枕をして、片腕が萎えたという逸話が紹介されている。一晩中、さらには夜ごと、手が萎えるほど手枕を続けたその痛みを思えば、そこから主君への並外れた忠義を伺い知ることができる。さらにいえば、大膳が小姓をして主君の夜のお供をしていたということは、衆道関係にあった可能性が高い。ところで、『葉隠』においては、奉公人は忍ぶ恋のように主君を思えば良いとされる。これらを考え合わせると、大膳は、恋人を思うように主君に尽くすという『葉隠』で理想とされる忠義のかたちを文字通り実践したと理解することもできよう。

このように、『葉隠』の「曲者」の用例には、武勇に並外れて優れているだけではなく、忠義に並外れて優れ、追い腹した事例、主君と一所に死んだ事例、命懸けで主君のために抗議した事例、あるいは、恋にも似た思いで主君に尽くした事例がある。これらの事例から、『葉隠』の「曲者」に、忠義に並外れて優れる、という規定を加えることができる。

三 心の強さゆえ、結果を省みずに、 即座に決断、実行できる

次に、複数の聞書で記される曲者の特徴として、その心の強さゆえ、いざというとき結果を省みずに、即座に決断、実行できる点を挙げるができる。これは、曲者というときに先行研究で共通してなされてきた解釈が剛の者であったことを踏まえると分かりやすい。心が強いと、決断できる。すなわち、心が強いから、いざというとき、例えば端的には、武勇を働かせる戦や喧嘩の場において、即座に決断

し、実行できるのである。そして、その同じ心の強さが、とき主君に忠義を尽くす場面にも適用されていたのである。本節では、このような曲者の即座の決断と実行について、いくつかの用例からその内容を確認する。

まず、一の五五で、武士は、喧嘩の場において、その場ですぐに打ち返しをしないと恥になるといふ。その打ち返しの方法とは、踏み込んでいって斬り殺されるだけであり、それで、恥にならない。それを、相手を倒そうと思うから、間に合わないという。そうしてそのうち、相手は大勢だからといって時を移し、やめる相談になる。それでは結局、武士として即座に決断して行動すべきその場を外し、恥をかくことになる。それとは対照的に、勝ち負けを考えず、相手が何人であれ、片っ端より撫で切りにすると決めて実行すれば、成就する。そしておそらくは、実際に勝つことができるという。そして、このような主旨の聞書の最後に、曲者は勝負を考えず無二無三に死に狂いするだけだ、という。

この聞書では、勝ち負けを計算すると確実に勝とうとして機会を失い、恥をかいで終わりになるのに対して、むしろ勝ち負けを計算せずにその場ですぐに決断して斬りかかれば、可能性としても勝つことが多いし、仮に負けても結果として恥にはならず、武士としての面目を保つことができるという。それゆえ、曲者は勝負を考えず無二無三に死に狂いする、すなわち、戦や喧嘩の場において、勝ち負けの計算を辞め、即座に死を覚悟して、相手への打ち返しを決断、実行できるとされているのである。ここから、我々は、いざという場面において、その心の強さ、決断力ゆえ、即座に決断して実行できる点を、曲者の規定の一つに加えることができる。

さて、次に取り上げる二の四八も、ほぼ同趣旨の説話である。すなわち、公務などはし損じても言い訳ができるが、思いがけない事件（例えば喧嘩）に居合わせて、遅れをとってしまえば、言い訳ができ

ない。だから善忠（常朝の父）はいつも、「武士は曲者一種ですむ」と仰っていたのだ。もし即座の働きができなければ、悪名となり、身の置き所が無くなり、無念の思いで残りの一生を過ごすことになる。これは、日頃の心がけがなく、武士とはなんたる者かも知らず、うかうかと日を暮らした罰である。

武士は、その場ですぐに決断して相手に斬りかければ良い。出し抜に斬られたものは、武運が尽きたというだけである。斬った方も、逃れられぬ行きがかりで他に方法はないと覚悟して命を捨てているのだから、どうということはない。短気で家臣として相応しくないとされるだけである。いずれにせよ、喧嘩の当事者同士は、相手に向かって戦ったのだから、臆病者とは言われない。一方、同座していて何もしなかった者は、生きて恥をかい武士ではない。

その時がただ今とかねてから工夫、吟味して準備しておかねばならぬ。みな油断して、ほどほどに一生を過ごすのは不思議の幸せだ。対して、武士道は、毎朝毎朝死のイメージトレーニングをしてあれこれ切られ死に慣れておくものである。大変ではあるが、やればできることである、という。

この聞書では曲者が、常に死の覚悟をしていて、いざという時には即座に決断、実行できる、すなわち、喧嘩の場において、死を選びとって相手に斬りかけることができる⁸とされている。ここから我々は、いざというときに即座に決断して実行できるという曲者の特徴を見取ることができる。

他方、いままで見てきた二つの聞書とは対照的に、喧嘩で負けて打ち返さない例が、八の三五で挙げられている。すなわち、そこで取り上げられている浅草喧嘩では、二人の武士が茶屋の男たちと口論になり、散々に殴られたところ、それを聞いた仲間の一部は打ち返そうと主張したものの、別の仲間から、御家の難儀になる、との意見がでて、結局打ち返さなかった。その結果、喧嘩に負けた二人の武士は武

士としての面目を失い、さんざんに打擲された後切り捨てられ、打ち返しに行かなかった仲間たちもお叱りにあったという。武士は、いざという時に打ち返すことができないと、恥をかくのみならず、当事者は武士道不心得ということで罰せられ、生きてゆくことさえ許されなかったのである。

そして、この喧嘩の経緯を踏まえ、この聞書の語り手は、次のようにまとめている。すなわち、曲者は、あれこれ議論せずに、ひそかに抜け出して死ぬ者で、し果たす必要はないという。ここからも我々は、前に取り上げた二つの説話と同様に、曲者が、結果を省みず即座に決断、実行できる者とされているのを読み取ることができる。

四 死の覚悟と死に際の良さ

さて、いざという時に即座に決断、実行できるためには、その前提として、いつでも死ぬる、死の覚悟ができていなければならない。そして、死の覚悟⁸ができていれば、死に際しても取り乱すようなことはない。八の八七では曲者は死場が平生と変わらぬ者とされ、一一の一二五では、曲者は死に際が良いとされる。逆に、日頃どれだけ大きな口を聞いていても、死に臨んで取り乱すのは、真の勇士ではないとされる。

ここに我々は、曲者の規定に、死に際の良さ、さらにその前提として、死の覚悟ができている点を加えることができる。

五 夢覚める

それでは、死の覚悟を持ち、いざという時に即座に決断、実行できる、すなわち、死地に突入できるとどうなるのか。一の五五の最後には、『葉隠』の語り手は、夢覚める、という。すなわち、私利私欲に

引きずられた夢のような世から覚め、武事と奉公に全力を尽くす本当の充実した生を送ることができるという。⁹⁾

六 頼もしさ

次に、曲者は頼もしい、とされる。すなわち、一の二三二、一一の四二は、いずれも『葉隠』の語り手山本常朝の父の、「曲者は頼もしい」という言葉を佐賀鍋島藩の武士が守るべき教訓として紹介している。すなわち、一一の四二では、父の教訓を列挙しているなかの一つとして挙げており、一の二三二では、さらにその言葉について以下のように説明している。曲者は頼もしい。首尾が良いときには来ないが、人が落ち目になると密かにやってきて頼りになる。すなわち、通常、人は首尾が良いときにはその人と交流することによって自分が得をするため他人が近づいてくるが、いったん首尾が悪くなるとその人と関わっても得にならないため他人は遠ざかっていくものである。他方、曲者は人の首尾が良いときには放っておくが、首尾が悪くなると助けに来てくれるので、頼りになる、という。

通常、人は損得を計算して人と付き合うため、落ち目になると離れてしまうことが多い。しかし、曲者はそういった通俗的な常識からは外れ、それを越えているため、それとは対照的に、むしろ落ち目になると助けに来てくれる。よって、曲者は頼りになるとされているのである。

七 武士の一分

ところで、曲者の頼もしさは、「武士の一分」を守るものの頼もしさと言っても良いだろう。武士の一分とは、武士が自ら守ると決めた領域のことであり、その領域の中には、主君や自分がそれと認めた仲

間との関係が含まれる。そして、一分を守る武士は、たとえ自分が損をするとしても、一度自分が契りを交わした主君、妻、仲間が決して裏切らない、とされる。¹⁰⁾『葉隠』において、このような武士の一分が極めて重視されていることを踏まえるならば、前節で触れた一の二三二の主旨も、曲者は、武士の一分を守るので、一度契りを交わした武士仲間であるならば、その後たとえば相手が主君の不興を得るなどのことがあつて、相手と関わりと自分にも害が及びかねないことから、皆が関わりを避けるような状態となつても、そういった利害損得に関わりなく、困った時には助けてくれる、と理解できよう。¹¹⁾

そして、このように曲者と武士の一分を関連付けると、曲者の他の用例のなかにも、随所に武士の一分を守っているものがあることが想起される。

例えば、既に触れた一の五五において、曲者は、いざというとき、無二無三に死に狂いするので、恥にならない、という。これも、武士はいざというとき死を覚悟して刀を抜くという武士としての領域を守り、一己の武士の矜持を保っていると理解できる。

あるいは、二の四八の用例で、曲者は、喧嘩で切りつけられたときなど、即座に刀を抜くことができる。そうすれば、勝っても負けても恥にはならない、というのも、武士としての己の領分と矜持を守っているという理解できる。

また、既に触れたように、八の六六では、手切れの権之助が、主君を貶めた相手に、片腕で勝ち目がなくても命懸けで猛然と抗議し、訂正して詫言を入れさせていた。これも、主君の名譽を守ることを己の持ち場とした権之助が武士の一分を守ろうとしたと理解できる。

あるいは、武士の一分を守り、兄弟のために抜くべきときに抜くことができた曲者の例として、七の二五に記された、大野千兵衛を挙げることができる。すなわち、大野千兵衛は、藩主鍋島勝茂が江戸参勤の間、代理で藩の留主を預かっていた鍋島直澄が助太刀を禁じていた

にも関わらず、兄が一对一の決闘で負けそうになると、乱入、助太刀して相手を殺している。これに対して、藩のお歴々が詮議で禁にしたがつて処罰しようと議論していたところ、江戸から帰って来ていた勝茂が、「千兵衛は曲者だ。よくやった。目の前で兄が斬られ、自分の命が惜しいからといって見たまま帰れるか」といつて褒め、罪を許し、後に御鷹師に取り立て、懇ろに召し使ったという。

ここで千兵衛は、常識に従うならば、一对一の決闘に助太刀しない、という藩主の代理直澄が決めたルールを守るべきであった。しかしながら、ここで千兵衛は、禁を破り、罰で死なねばならぬことを覚悟の上で、喧嘩に乱入して兄に助太刀している。これに対して、『葉隠』の世界では理想の主君の一人とされる鍋島勝茂がは、「曲者」との認定を与えて褒めているのである。兄が目の前で殺されるのを、たとえ禁があるとはいえ、何もせずに見てはいられない。これは、いざというときに、常識的な判断を超えて、死生を共にすべき兄弟と運命を共にし、それを即座の行動で示したということである。そしてこのような武士は、一分を守る武士であり、頼もしい武士である。きつと、主君や御家が危機の際にも、同様の行動ができるはずである。このように、千兵衛もまた、常識を超えた視点から、武士の一分を守り、武勇と忠義に優れ、抜くべきときに抜くことができた武士であったのであり、典型的な曲者であったといえよう。

このように見ると、曲者は、尽くす決めた主君や、共に戦うべき兄弟、あるいは一度契りを交わした仲間、相手がどれだけ不遇になつて見捨てず、また、武事においては、いざというときには刀を抜いて己の領域を守り、あるいは、忠義においては、主君が貶められたら命懸けで抗議してその名誉を守る、というように、武士の一分すなわち己が守ると決めた領域と誇りとを、命懸けで守るものであることが理解できる。

八 常識を外れる

ところで、既に触れたように「曲者」の「クセ」とは、外れていることを意味する。曲者には、常識的な正しさを基準とすると、そこからは外れた点が存在する。そのうち、これまでは、主に武士道の常識である武勇や忠義、武士の一分などを踏まえつつ、それが並外れて優れている例を取り上げてきた。本節では、それらとは異なり、むしろ、武士道の常識に照らして、一見するとそこからは外れたように見える事例を取り上げ、その内容を見てゆくことにする。¹²⁾

(1) 並外れた武勇と忠義を臆病で欲深なふりをして隠す

まず、本節で見えておきたいのは、曲者が一見すると武勇に優れ死地に突入できるのとは正反対の言動を取ることがある、ということである。すなわち、これまで見てきたように、武勇に優れいざというときには速やかに決断して死地に突入することを武士のあるべき振る舞いとするならば、曲者はさらにそこから外れたきわめて臆病な言動を取ることがある。

例えば、既に取り上げた志田吉之助は、一の四八で、次のような言葉を残したという。すなわち、「生きても死んでも残らぬものならば、生きたがまし」と。志田吉之助は、『葉隠』における代表的曲者の一人であるが、その彼が、ここでは生か死かの選択を迫られた際生きている方がましというように、本稿でこれまで繰り返し見てきた曲者の本質的な規定とは正反対の臆病な発言をしているのである。このような発言はどのように理解すれば良いだろうか。

この発言の真意を理解するためには、彼について詳しく語られた八の六九を見ておく必要がある。そこには、既に触れておいたように、志田吉之助が、山賊に出くわし、三人を殺し、二人を手負いにして追

い払ったとされている。一人で少なくとも五人を相手に戦闘し、実力で圧倒しているのである。ここから、吉之助が一人で五人以上の山賊に出くわした際、逃げるのではなく、死ぬ可能性の高い刀を抜く、という選択をしたことは明白である。しかしながら、そこで皆が曲者と褒めたところ、当の吉之助は、自分は臆病だから、命が惜しくて相手を先に斬ったのだ、などとうそぶいているのである。

このような自らを臆病とする発言の真意については、同じ八の六九の冒頭の記述を読み解くことで、その理由を理解することができる。すなわち、志田吉之助は、龍造寺隆信の子政家の小姓であった。そして、政家の死後は、仕官せずに隠遁していた。これは、『葉隠』の語り手常朝が主君光茂の死後出家隠遁したのと同様に、同じ主君に忠義を尽くし、一貫するためと理解できよう。しかし、志田吉之助は、その拔群の優秀さゆえ、鍋島家に実権が移った佐賀藩の家老・多久美作守から、執拗に仕官の誘いを受けてしまう。そこで、吉之助は、臆病者のふりをして、仕官を断っているのである。もちろん、彼ほどの実力者が仕官すればそれなりの扶持が得られ、生活は安定しよう。そうしなかった彼の生活が相当苦しかったであろうことは、山賊と喧嘩した際に、目薬売りをしていたことから明らかである。しかしながら、彼はそれでも節を曲げず、己がこれと決めた主君政家への忠義を生涯にわたって貫き、二君に仕えることはしなかったのである。これは、並外れた武勇を臆病のふりをして隠しつつ、かえって並外れた忠義を示しているといえる。

そして、彼の演技は単に臆病であることに留まらない。同じ八の六九には、さらに、彼が欲深なふりをして金銀を集め、堀に隠したり柱の節穴に鑄込んだりと、お金に賤しい振る舞いをしていたことが記されている。しかし、後にこれも実は世を偽る仮の姿であったことが明らかになる。佐賀藩主鍋島勝茂が亡くなった際、吉之助の親友で、勝茂の家老であった美作守は、吉之助に、次の藩主・鍋島光茂へ、前の

主君勝茂の言葉の主旨をまとめた詳細な書付を送ろうとして、吉之助に意見を乞うた。すると吉之助は、退屈したから帰るという。怒った美作守に対して、吉之助は、次のように言い放ったという。すなわち、お前は人並みの家老かと思っていたが、何の役にもたないものだった。というのも、家老というのは、主君に家臣の心が付くようにするものだ。しかし、今の書付を家中のものに見せれば、みな先代の勝茂公を有難く思い、お前のことを褒めるだけだろう。そうすれば、新しい藩主・光茂公へ心が付かなくなるのは明らかである。忠義ある家臣の振る舞いとは、その書付を今の殿の言葉として、自分が取り継いだとは夢にも知らせず、今の殿は勝茂公にも勝った人だと皆に思わせるようにすることだ、という。それを聞いた美作守は、だからお前に相談したのだ、といって、すぐにその書付を破り捨てたという。この説話からは、吉之助が私利私欲を抑制し、徹底して忠義を尽くす家臣であったことが分かる。そして、このことと、これまで見てきた臆病なふりをしていたことを踏まえるならば、一見すると非常識で非道なお金への執着もまた、世を偽る仮の姿であったことが理解できる。

このように、曲者、吉之助は、臆病なふり、欲深なふりをして世を偽っていた。これは、武士の標準的な正しさとも、本稿でこれまで見てきた曲者の規定とも、真つ向から反するものである。しかしながら、その背景を掘り下げてみると、むしろ、そこには突出した武勇と忠義、そして私利私欲の抑制があった。ここに我々は、より徹底した武勇と忠義の立場から、あえて臆病で欲深い仮の姿を演じてみせる、曲者の常識を越えた姿を見て取ることができる。

(2) 主君の命令に反する

次に、曲者が常識を外れている別の類型として、主君の判断や命令に反してもよいとする説話、一の八七を見てみよう。この聞書では、ある侍が、褒美の加増があると自他ともに期待していたところ、思い

のほか加増がなかった。それを気に病んで隠遁しようとしたところ止められた、というものである。この侍に対して常朝は、自分のために奉公していると厳しく切り捨てている。そしてそれとは対照的に、咎がないのに切腹を命じられて、それでも一歩前に進むのが譜代の家臣だという。殿様の言うことには、当否善悪に拠らず、ただひたすら従ってみせるのが、譜代の家臣であるというのである。ここまで見てきた限り、ここでは譜代の家臣とされている家臣が、これまで見てきたような、並外れた忠義を尽くす曲者とほぼ一致するのに見える。しかし、この聞書は最後に、さらに内容を一転させる。すなわち、「ただし、曲者は別である」というのである。これは、ここまでの説話の主旨が、譜代の家臣は善悪是非を問わず主君の判断にひたすら従うべき、というものであったのに対して、それとは別である、ということである。つまり、これを素直に解釈すれば、曲者はときに主君の判断や命令に反しても良い、あるいはさらに、ときには積極的に反するべきである、ということになるだろう。

どういうことだろうか。この点については、この聞書に具体例が記されていないため、この部分からだけでは、その具体的な内容を理解することが難しい。『葉隠』における「曲者」の他の用例のなかにも、主君の判断や命令に反するものを見出すことはできない。そこで、『葉隠』の語る曲者の性質を持った武士で、主君の命令に必ずしも服従しない、あるいはときに反した武士を『葉隠』および関連する周辺の文献のなかを探して見ると、何人か当てはまる者がいる。以下、その代表的な人物に即してこの点についてさらに掘り下げて解釈しよう。

はじめに取り上げたいのは、『葉隠』を代表する曲者とされる斎藤用之助である。この斎藤用之助は、『葉隠』で取り上げられる際「曲者」と直接明記されているわけではない。しかし、武勇と忠義に並外れて優れ、さらにときに常識を外れた振る舞いをするという点で、本

稿でこれまで見てきた曲者の特徴とびたりと一致しており、曲者の代表人物と見て良い。

さて、三の一六によれば、斎藤用之助は、かつて戦国の世にあつて佐賀鍋島藩祖直茂と共に戦い、何度も高名を取った歴戦の勇士であり、武勇と忠義に並外れて優れていたが、ときに主君の命令に反するような振る舞いをするものがあつた。すなわち、戦乱の世では活躍できた用之助であつたが、泰平の世となり、主君も直茂の息子の勝茂に代替わりすると、ほとんど顧みられることもなくなり、ついには妻に米を食べさせることにすら窮するようになった。そこで用之助は、お城に運びこまれる米を商人から刀を抜いて奪い取り、その咎で、詮議の上死罪と決まった。すると、その報告を聞いた先代の主君直茂とその奥方が急に涙を流し出し、次のように述べた。すなわち、今日我等夫婦が安穩に暮らせるのは用之助らが貴重な命を懸けて戦ってくれたからであり、とりわけ用之助は幾度となく高名を得た者である。それを米すら食えないようにしたのは我々の罪である。あれを殺してどうしてわしが生きていられるものか、と。すると、それを伝え聞いてその意を汲んだ当代の勝茂が、親孝行のためということで、罪を許したという。

さて、この説話において、用之助は、お城に運び込まれる殿様の米を強盗するという、当代の主君に背くという意味でも、強盗したという意味でも、明らかに禁令違反を犯しており、死罪は当然である。しかしながら、泰平の世の今の御家が、かつて戦乱の時代に命懸けで戦った自分たちの働きの上になり立っており、いざというときには今も同じであるという、武士としてのより原理的な立場から見ると、米は十分に支給されて当然であり、それがなければ殿様にもらうというのも、当然であるということになる。実際、二の二五において、奉公人は、ひたすら奉公につとめるならば、普段の生活についてあれこれ心配する必要はなく、殿様にまかせておけばよい、とされる。とい

うのも、いざというとき、主君の命令を守り、御家を守るのは、彼らのような徹底して武勇と忠義に心がけるものだからである。このように見ると、ここで用之助が主君の命令を破っているのは、単に忠義に欠け、私欲を満たすためにしているのではなく、いざというとき主君のために命懸けで戦うために生活を守るといふより徹底した武勇と忠義に裏打ちされたことであつたことが分かる。曲者は、常識を超えた武士としてより徹底した武勇と忠義の立場から、ときに平然と主君の命令に背いてみせるのである。¹³⁾

(3) 主君に諫言する

また、主君の命令や判断に反するという点で、次に思い当たるのが、家老が主君に諫言する事例である。よく知られているように、『葉隠』には家老になつて主君に諫言し、国家（藩）を治めることが奉公人の理想とされ、それについて言及された開書がいくつが存在する。¹⁴⁾そして、そもそも諫言自体が、ときに主君の命令や判断に反して、それとは異なる意見を言うことであり、主命にひたすら従うべきとする武士道の常識とは反する。にもかかわらず、『葉隠』では、むしろそれが理想の奉公人のあるべき振る舞いとされているのである。ただし、もちろん何でも主君の意見に逆らえば良いというわけではない。とりわけ、私利私欲からの諫言は厳しく戒められている。しかし、それとは対照的に、私利私欲を抑制し、徹底した忠義の立場から諫言することは、大いに推奨されている。そして、そのような立場から諫言した家老は、理想の奉公人と讃えられているのである。¹⁵⁾

このように見ると、曲者は、ふだんは奉公人として主君に忠義を尽くしているのももちろんだが、かといって何でも主君の意見に盲従するのではなく、ときにより徹底した忠義の立場から主君の命令や意向に反するような言動を取っていたことが分かる。そしてそれが、理想の奉公人の姿として、むしろ望ましいこととされていたのである。

(4) 単なる非常識との違い

本節では、曲者が常識を外れているという点について、『葉隠』の用例から、その内容を確認してきた。しかしながら、ここで注意しておきたいのは、曲者は単なる非常識ではない、ということである。もう少し詳しく言うと、曲者は、私利私欲を抑制し、武勇や奉公に優れるという武士道の常識を踏まえ、より優先すべき正しさに立った上で、ときに常識をあえて否定しているのである。他方、『葉隠』においては、このような本来の曲者とは対照的に、武士道における正しさ、常識を踏まえないまま、むやみやたらに強気で常識外れな振る舞いをして表面上曲者を装う武士を、本物の曲者ではないと厳しく非難している。

例えば、一の五七では、「なにがしは氣丈者である。だれその前でこのようなことを申した。」と話す人の意見に対して、常朝は、それが面に似合わぬ言い分であり、曲者と言われたいだけだと切り捨てている。そして、侍たる者はまず礼儀正しくてこそ美しいと、常識的な礼儀を踏まえるべきことを強調する。ここでは、単に非常識で無礼な振る舞いは、本物の曲者とは異なると、強く戒められているのである。

あるいは、一の四三では、三代藩主綱茂の娘、峰姫と、上杉吉憲の婚姻の際、ある家臣が、自分なりの意見（おそらくは反対意見）を表明して出仕を止め、その結果、峰姫の養育もできなくなり、姫が追つて亡くなったことについて、山本常朝は、褒めるものもあるかもしれないが、このようなものは決して曲者ではなく、そう言われたい名声のための言動であり、何の役にも立たない、と切り捨てている。そして、それに相応しい位でなければ、諫言などするものではない。自分がそれに相応しい位でない場合、自分を立てず、相応しい位の人に相談して、その人に言ってもらえば、事は整うものである。そして、本當の忠節とは、人に知られないようにするものであるという。ここで

も、単なる非常識な強さは、曲者と言われない名誉欲からの言動であり、まずは「その位にあらざればその政を謀らず」（『論語』泰伯第八「一四」といった常識を踏まえるべきとされているのである。

九 まとめ

最後に、本稿で見てきた『葉隠』における曲者の解釈をまとめておこう。

曲者の曲（クセ）とは、外れたという意味であり、曲者とは外れた者という意味である。ではどこから外れているかというところ、総じて言えば、常識から外れているという意味であった。ところで、常識から外れるというと、良い意味にも悪い意味にも取れるが、『葉隠』の用例を見る限り、そのほぼすべてが良い意味で、すなわち、武士の常識を超えた、並外れて優れた武士の意味で使用されていた。

では、どのような点で優れているのか。第一に挙げられるのが、武勇に並外れて優れている、という点であった。これは、武芸に優れていることを意味することもあるが、仮に武芸に優れていなくても、戦や喧嘩、乱心ものを取り押さえるといったいざ武士として武事のはたらきが求められる場面で、勝負、生き死にといった結果を考えず、死を覚悟して即座に刀を抜いてはたらき、武士としての領域を守れるような勇氣があれば、曲者とされた。このことから、武勇に優れることは、武芸に優れること以上に、勇氣が重視されていることが分かる。

次に、曲者が並外れて優れている第二の点として取り上げたのが、忠義・奉公に優れるという点であった。主君の死に際して追腹したり、いざというとき一所に死んでいたり、主君の名誉が貶められたら命懸けで抗議したり、恋をするような思いで主君に尽くしたりするような武士が、曲者として賞賛されていた。

また、これは勇氣に優れた点とも連続するが、曲者の特徴として、

その心の強さ故、結果を省みずに、即座に決断、実行できる点が繰り返し強調されていた。

あるいは、曲者は死場が平生と変わらず、死に際が良いとされ、逆に、いくら普段は威勢の良いことを言っている、死に際に取り乱すのは曲者ではないとされた。ここから、曲者の心の強さには、その前提として死の覚悟が求められていることが分かる。

そして、曲者は死の覚悟があるため、私利私欲に引きずられる夢のような世から覚め、本当に実りあることに覚醒した、夢覚めた生を送っているとされた。

また、曲者は、契りを交わした主君や妻、兄弟や同志に対しては、たとえどんなに落ち目になっても見捨てない頼もしさがあった。そして、いざというときには死を覚悟し、武士として抜くべき時に刀を抜くことができた。すなわち、曲者は武士の一分、つまり、己が守ると決めた領域と誇りとを、命懸けで守るものであった。

また、曲者とは、単に常識を超えて並外れて優れているに留まらず、ときに武士道の常識を外れるような振る舞いをした。例えば、主君への忠義を徹底するために、臆病で欲深いふりをして優れた武勇と忠義を隠すようなこともあった。また、常識を超えた武勇と忠義の立場から、ときに主君の命に反したり、諫言したりするものもあった。ただし、これら常識を外れた曲者の振る舞いは、単なる非常識ではなく、常識を踏まえた上で、より以上の徹底した武勇と忠義の立場からなされたものであった。以上、本稿の曲者の解釈をまとめておく。

注

(1) 『葉隠』における「曲者」の用例はすべてで二八例ある。そのうち、その間書から曲者の内実を読み取ることが難しい二例（二六の三七、一〇の一八九）を除いたすべての用例が取り上げられる見通しである。

(2) 『葉隠』において曲者が良い意味で使われていることを裏付ける説話とし

て、例えば、聞書六の一〇を挙げるができる。ここでは、『葉隠』の語り手山本常朝の父で、『葉隠』の中でも優れた武士として高く評価されている重澄が、一門の子どもたちに「大曲者になって殿のお役に立ちなさい」と言い聞かせたとされている。あるいは、二の四八では、同じ重澄が、武士は曲者一種で済むと言っていたという。また、一の三〇では、「義経軍歌」の一説として大将は人によく言葉をかけよという言葉が紹介され、そのかけるべき誉め言葉の一つに「曲者」が挙げられている。これらの用例から、曲者は武士のあるべきありようを表す良い言葉として使用されていることが分かる。

- (3) 栗原荒野「校註 葉隠」(青潮社、昭和五〇年)四五頁。

(4) 佐藤正英、吉田真樹、木村純二、板東洋介、上野太裕、岡田大助「定本 葉隠 全訳注(上)(中)(下)」(ちくま学芸文庫、平成三〇年)(上)九一頁。なお、本書の訳注の作業には論者も参加しているが、該当箇所は、論者ではなく、吉田真樹の担当である。

- (5) 菅野寛明、栗原剛、木澤景、菅原令子「新校訂 全訳注 葉隠(上)(中)(下)」(講談社学術文庫、平成二九・三〇年)(上)一〇〇頁。

(6) 『葉隠』の聞書の分け方や聞書の番号の振り方には諸説あるが、本稿では、前掲「定本」に従う。なお、本稿では、典拠となる説話の巻数と番号を示す際、聞書という言葉を付けるのは煩瑣となるため、以下省略し、巻数と番号のみを記すことにする。

- (7) この三人の追腹については安部龍太郎が歴史文学『葉隠物語』(H&I出版、平成二四年)第一四話において「曲者たち」と題して詳しく取り上げている。

(8) 『葉隠』において、死の覚悟は、その武士道の究極を一言で表す言葉であり、それを明らかにすること自体が『葉隠』研究の究極の目的といってもよいが、この点についての詳しい考察は、将来の課題とする。さしあたり、現状の最も優れた先行研究の一つとして、相良亨「『葉隠』と現代——死ぬことと見付けたり——」(『伝統と現代』、昭和四四年六月号) 参照。

(9) 『葉隠』における夢幻観については、相良亨「夢幻観をめぐって——『三河物語』と『葉隠』——」(『べりかん社』、『日本人の死生観』、昭和五九年、一二一—一五三頁) 参照。

(10) 拙論「『葉隠』における武士の一分について」(『江戸川大学紀要』第三三三号、令和五年三月、一七三—二〇頁) 参照。

(11) これに似た趣旨の説話はいくつかあるが、例えば七の三二では、主君の不

興を買い牢人となった小川舎人の娘である妻に対して、周囲が妻と離縁するよう勧めても、鍋島左太夫が罪のない妻とは断じて別れぬとその一分を守り、妻の死後も小川の縁者から嫁を取って小川との同志の契りを守り抜いたことが好意的に取り上げられている。

(12) 相良亨は、既に前掲論文「『葉隠』と現代——死ぬことと見付けたり」において、本節で指摘する「曲者」が常識を外れている点とほぼ同じことを、「格を離れている」「一般的な奉公人の枠で測ることはできない」者と規定している。その上で、頼もしさや、曲者の主君の命令にときに背く点、さらに、死の覚悟に徹し、死に際が良い点についても指摘している。これらは、本稿で見てきた曲者の規定のいくつかを先取りし、その要点を鋭く指摘するものである。ただし、相良の理解は、曲者を「一般的な意味では主君の御用に立つものでもなく、また望ましい奉公人でもない。」と規定し、はじめから終わりまで一般的な常識に反するものとして理解している。しかしながら、本稿前半で指摘してきたように、葉隠における曲者は、並外れて武勇や忠義に優れ、武士の一分を守るといったように、一般的な武士の常識を正の方向に延長し、並外れて優れているという側面もあった。相良の理解は、はじめから一般的な常識に外れた点を押さえたことで、常識の延長上にある曲者の並外れて優れた側面を見落としてしまっているように思われる。他方、本節でも後述するように、曲者は一般的な常識を外れ、ときに主君の命に反する側面を持っているが、この側面においても、その背景を探てゆくと、そこに徹底した武勇や忠義を見出すことができる。確かに、曲者は一般的な奉公人の枠で測ることはできないが、その背後には、一般的な武士の常識の延長ともいえる徹底した武勇や忠義、武士の一分があるともいえる。

(13) 続く三の一七は、斎藤用之助が主君勝茂の前での鉄砲訓練で的を狙わずに空をから撃ちし、勝茂がそれを咎めさせようと直茂に申し出たところ、直茂が用之助をかばう、という話だが、これも、より徹底した武勇と忠義の立場から主君の命令に反するという点で、ほぼ同趣旨の説話である。

(14) 一の一、二の二三九、二の一四〇参照。

(15) 私欲を離れた諫言の例については、中野将監が密かに鍋島光茂に諫言して三家との不和を鮮やかに解決してみせた五の九八参照。あるいは、別の類型として、家老としての確たる立場と主君との強い信頼関係を背景に、切腹を仰せつけられても強く異見を言い続けた相良求馬の事例や、主君が死罪を命じた家臣を助けるよう、断り続けられても七度も異見を続けて主君の考えを変えさせた中野数馬の事例が挙げられた一の二三六も合わせて参照のこと。

